

fure-fure





各学年の大学生生活

■1回生■



新しい生活様式のなかで、段階的に対面授業が再開されました。これまでのオンライン授業だけでなく、学内での講義・演習が組み合わせられたハイブリット型授業となったため、それぞれがスケジュール調整に奮闘しながら、受講や演習、課題に取り組みました。また、12月には初めての実習となる「ふれあい看護実習」がありました。病院ではなく学内での実習となりましたが、健康を障がいされた経験のある人からお話をうかがったり、医療に携わるさまざまな職種の方のお話から、それぞれの職種の役割を知ることを通して、これまで学んできた知識や技術を看護援助として活用することや、看護職としての役割についても考えを深めました。

その他、所属しているサークルでの活動や新たなサークルの立ち上げ、ボランティア活動の再開に備えたガイダンスへの参加など、自分たちのペースで学年や学部を超えたつながりを築きながら、学外での活動にも取り組んでいます。

■2回生■



2回生は、12月のクリスマス会の開催に向けて、11月からクリスマス委員を中心に全員が協力して準備に取り組みました。今回は、残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響で開催することができなくなりましたが、国家試験に向けて日々頑張っている4回生に少しでも励ましの気持ちを届けたいという思いから、作成したアルバムとお菓子を手渡し、心を込めてエールを送りました。

後期からの地域学実習Ⅱでは、学生それぞれが地域の課題を見つけて主体的な活動を始めています。また、老人看護援助論の授業では、学生が対面や遠隔授業の中で、様々な疾患状態にある高齢者ケアの特徴について調べ、ディスカッションしたことを発表しました。

後期になると履修科目も増えて、専門科目も難しくなってきます。遠隔授業は孤独になりがちですが、合間にある対面授業での同級生との意見交換の場を通して、1回生から学んできた知識を活用し、視点を広くもって深く思考する姿が頼もしいです。

■3回生■



3回生は地域看護、慢性期看護、精神看護、急性期看護、母性看護、小児看護の6領域で、10月～12月まで臨地実習、1月～学内実習を行いました。COVID-19の影響により、病院や保健所での実習期間は例年に比べると短縮されましたが、臨地でしか学べない貴重な体験を経験することができました。さらに学内実習では、根拠をもとに学びを深めていく学習を繰り返しておこないました。

領域実習を通して、卒業後の進路選択の動機付けとなり、目指す将来の自分の姿を見据え、就職や4回生の実習・看護研究に向け少しずつ準備を始めています。実習を受け入れてくださった病院、指導してくださったスタッフ、学生の受け持ちを快く承諾してくださった患者さんに心より感謝いたします。

■4回生■



今年度も残りわずかとなり、4回生は集大成の時期を迎えています。今は国家試験受験のため、毎日コツコツと学習を継続しています。この1年を振り返ってみると、新型コロナウイルスの影響は大きなものでしたが、感染予防対策を徹底し、学内のみならず、学外関係機関の皆さまからのご支援をいただきながら、この1年の講義・実習を無事に終えることができました。

就職試験も日程や試験方法など度重なる変更がありましたが、一人一人が自分と向き合い、最終的には納得のいく進路を決めることができ、社会に出る若者として大きな成長を遂げた1年となりました。残すゴールは、看護師・保健師・助産師国家試験合格です。4月から模試、個別・グループ学習会、特別講義の受講など様々な対策に取り組んできました。4年間の大学生活で培った力を国家試験本番でも最大限発揮できるように、「最後まであきらめない！勝利への壁を実力で突き破ろう！」という言葉を胸に、受験地に出発しました。



■ 学生生活を支える ～コロナ禍での学生支援～

学生支援部：中山 えり子

事務局で学生支援部長を務めております中山と申します。本学に着任して2年目になります。

2020年は新型コロナウイルスの影響に始まり、1年が経った今も未だ収束の兆しが見えません。この1年は学生の皆さんが思い描くような学生生活ではなかったかもしれませんが、登校すらできない大学もある中、教職員が一丸となってコロナ禍であっても何とか皆さんの学修機会を確保することができました。

私たちは、まず全学生に「健康チェックシート」で自己の健康管理をお願いしました。きちんとした自己管理が感染予防の前提となっています。そのうえで、基本的な手洗い、マスク、社会的距離の確保を徹底し、感染を避けるための学内ルールを設け、これらを「学生のための新型コロナウイルス感染拡大防止のためのガイドライン」にまとめ、感染状況に応じて随時改定してきました。

併せて健康管理センターから、学生の皆さんの不安を少しでも軽減するため、ほぼ週に1度のペースで「新型コロナを乗り越えるために」としてお知らせしてきました。学生の皆さんからは、「また来た」「もうわかってる」と聞こえてきそうなくらい（笑）注意喚起を行ってきましたが、ほとんどの大学が遠隔授業の中、6月には対面授業、7月には外部機関での実習をスタートさせることができました。これは、看護学部をはじめ健康に関わる専門分野を学ぶ大学の学生の意識の高さと、先生方の専門知識に基づいた適切な指導があったからこそできたことだと思います。

また、本学でもコロナにより経済的な影響を受けた学生さんは少なくありません。特にアルバイトやご家庭の収入の減少が目立ちますが、国の修学支援新制度、緊急給付金、本学独自の授業料免除、家計急変への対応、また後援会、同窓会の緊急奨学金の給付など様々な支援を行い、まだ一人の脱落者も出していません。

本学に着任して一番感銘を受けたのは、先生方と学生の皆さんの距離が大変近く、先生方が常に学生に寄り添い、時に厳しく、時に心配し気を揉まれる、そういう姿でした。こうした日常が一人の脱落者も出してないことにつながっていると思います。

私たち教職員は、ひとり一人が気になるリスクを見つけるたびに、大学全体でその対策に取り組んできました。この取り組みを今後も続け、学生の皆さんがコロナ禍にあっても有意義な学生生活を送れるよう支援をしていきたいと思っています。



■ 健康を守る 保健師：三宮 文枝、足利 幸乃

健康管理センターの健康管理サポート

高知県立大学池キャンパスでは、図書館や学生食堂のある共用棟の2階に健康管理センターを設置し、学生の皆さんの健康管理をサポートしています。健康管理センターには、事務室、セルフコーナー室、休養室、専門相談室があり、職員2名が常駐しています。主な活動としては、定期健康診断、健康相談、学内でのケガや体調不良への対応、感染症対策、健康情報の提供などがあります。毎年4月に実施している定期健康診断では、胸部X線撮影、尿検査、内科診察等の項目で健康状態を把握し、定期健康診断後のフォローを行っています。

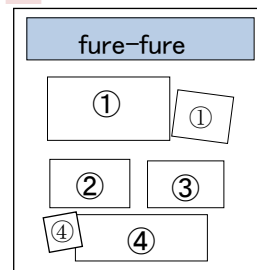
一般的に、大学生は健康上の問題が少ないとみられていますが、青年期にある大学生は心身の大きな変化を経験します。同時に、大学生ならではの新しい環境、新しい経験が学生さんの心身に影響を及ぼします。これらの影響をうける心身の不調は個別的で多様です。このため、心身の不調については、職員による一般相談と専門家による専門相談で対応しています。専門相談には、精神科医師、カウンセラー、婦人科医師、助産師があたっています。

健康相談では、相談しやすい環境をつくること、相談のタイミングを逸しないこと、学生中心の相談であること相談情報を守ることを配慮しています。また、健康相談では、必要に応じた受診勧奨や受診先に関する情報提供を行っています。大学周辺や高知市について土地勘のない新入生、県外出身の学生さんには、特に丁寧に説明することを心がけています。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染から学生の皆さんを守ることを最優先に、三密の回避、手洗いやアルコール手指消毒の推奨、マスク着用等の感染予防に関するお知らせ、発熱や感染症状の発症者の健康観察など感染防止に努めてきました。感染予防行動が学内にしっかりと浸透するまで何度も同じことを注意しなければなりません。健康管理センターとして最善をつくし、学生の皆さんと共にこの状況を乗り越えていきたいと思っています。



■ 表紙の写真



- ①3回生：学内での実習の様子
- ②1回生：ボランティアのガイダンス
- ③2回生：対面授業の様子
- ④4回生：国家試験の壮行会の様子



「学びを守る」ハイブリッド型授業の取り組み

教務委員長：瓜生 浩子

新型コロナウイルス感染症により、大学での教育も大きな影響を受けました。本学では4月の授業開始を約2週間遅らせ、遠隔授業からスタートしました。本学における遠隔授業は、ラーニングマネジメントシステム（LMS）のMoodleを使ったもので、学生はインターネットを介してMoodleにアクセスし、教員が掲載した音声入り教材の視聴による学習や課題の提出などを行います。学生から提出された課題や質問へ教員が個別にコメントを返すことで、双方向のやり取りも可能です。遠隔授業開始直後には様々なトラブルがあり、教員も慣れないMoodleの操作や教材作成に四苦八苦しましたが、授業方法が変わっても学修到達目標は変わらず、学生の「学びを守る」努力をしてきました。



しかし、遠隔授業だけでは限界もあります。6月22日からは入構者数を学生定員の半数を超えないよう調整の上、感染拡大防止対策をとって、一部で対面授業を開始し、現在は入構者数を75%までとしています。実践の科学である看護では対面でしか学べないこともあり、学修の効果を考慮して選択的に対面授業を行ってきました。また、個々がパソコンに向かって受講する遠隔授業は、学生にとっては他の学生の状況がつかめず、孤独な学習となります。対面授業が間に入ることで、学生同士の相互交流の機会が得られ、長期間にわたり遠隔授業に取り組むモチベーションが維持できたと考えます。



一方で、遠隔授業と対面授業を並行して行うハイブリッド型授業は、学生自身でスケジュール管理を行い、学習調整をすることが求められます。この1年間で学生には、教えられたものを受け取るだけでなく、自分で学び取る意識が芽生えたように感じます。また、教員も遠隔授業を通して、本当に伝えるべきことを絞り、どうすればより学びが深まるかを考え、様々な工夫を行ったことで、結果的に授業改善につながっています。今後もコロナ禍に負けず、学生と教員の相互の努力で「学びを発展」させたいと思います。

つながりを保つ学生の活動

【UOK手話サークル】部長 1回生：徳永 旭

UOK手話サークルは、今年度新しく立ち上げ、11月より活動を開始したサークルです。このサークルでは、「聴覚障がい者についての理解を深めることで、日常生活でどのようなことに困っているのかを知る」また、「日常会話程度の手話を習得し、医療現場や災害時において、聴覚障がい者と手話を用いてコミュニケーションを取れるようにすることで、正しく情報を伝え、不安や悩みを少しでも和らげることができるようになる事」を目的としています。

主な活動として、日常会話でよく使う手話の単語の学習・学習した単語を用いた文章表現・聴覚障がい者に関わる日本のしくみについての学習・手話の歴史についての学習などがあります。週に1回火曜日にサークルを行っていますが、新型コロナウイルスの影響で活動が制限されるため集まって学習することは難しい状況です。そのため、SNSを用いて手話に関係する情報を発信し、手話を身近に感じてもらう工夫をしています。

この手話表現は、世界共通で「Love You」を意味します！



高知県のみならず、全国で手話を学ぶ10代・20代の若い方が少なく、特に医療現場において、手話を用いて会話や説明を行うことができる医師や看護師といったスタッフはほんの僅かしかいません。そのため、聴覚障がい者の方々は困っていることについて「病院に行くこと」「病気になっても自分の症状が分からないこと」と話します。

手話は言語です。そのため、話せるようになるには技術が必要となり、時間はかかります。しかし、手話はぎこちなくても構いません。聴覚障がい者について理解を深めることで、一人一人にできるサポートは多くあります。聴覚障がい者について知る・手話の大切さに気付いてもらうきっかけになればいいなと考えています。

学校での活動が再開できれば、少しでも多くの単語を習得し、実際に聴覚障がい者の方を招き、自分の手話が相手に伝わる喜びを体感し、多くの手話の魅力を発見していきたいと思います。

[ニュースレターの名前の意味]fure-fure 学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。 fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp